

## 2021年3月期第1四半期 決算説明会・主な質疑応答

決算説明会での主な質疑応答を掲載しています。

開催日時：2020年8月6日（木）

### <ご留意事項>

「主な質疑応答」は、説明会での質疑をそのまま書き起こしたのではなく、ご参加いただけなかった方々向けに、当社の判断で簡潔にまとめたものです。

また、本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

### 映像事業

Q：構造改革関連費用の50億円の使い道は。新型コロナウイルス感染症という特殊要因で売上高が大きく落ちたが、新型コロナウイルス感染症の収束後はどの程度まで回復すると見ているのか。

A：生産・販売の最適化をメインで行います。新型コロナウイルス感染症の収束後についてですが、BtoCの映像事業は来年度も影響が残ると見えています。

Q：来期以降、黒字を目指す上で、前提とする売上収益の水準はどの程度か。

A：売上収益が1,500億円でも営業黒字を達成する為、事業構造転換を加速するとともに、2018年度比で500億円としてきた事業運営費削減額も100億円追加して、600億円といたします。

### 精機事業

Q：コロナ影響に伴い、精機事業で多くの売上計上繰延が発生しているが、来期以降への売上に寄与するのか。

A：今期の連結営業損益見通しにおけるコロナ影響は650億円と見積もっていますが、このうち350億円程度が、FPD露光装置を中心とする精機事業の影響額で、この部分は来期以降への収益貢献が期待されます。

Q：半導体装置事業は、主要顧客の7nmノード向け投資計画が延期と報道されているが、どの程度影響があるのか。

A：最先端且つ大規模な生産能力が当該顧客の強みでもある為、直ぐに急激な変化が生じることはないと考えていますが、来期以降の同社の投資の規模・タイミング次第では、当社ビジネスにも影響は生じて参ります。既存ノード向け追加投資の受注獲得や、長期・安定的な関係の構築が期待できる新たな顧客の開拓等を強化することで、事業収益の安定化を着実に進めて参ります。

## 全体

Q：将来の成長に向けた投資に関する言及がいくつかあったが、キャッシュアウトを絞る局面ではないか。設備投資やR&Dの計画はどのような前提を置いているのか。

A：もともと5年間で、キャッシュフローのうちの40%以上を成長投資やR&Dに、10%を配当などの株主還元を使う予定でした。全体の利益が落ちている中で、キャッシュフローが苦しいのは事実です。しかし、6月末の時点で、3,000億円と銀行からの借入金1,000億円、合計4,000億円を確保しています。これらの資金を成長投資やR&Dに効率的に回していきます。

Q：今期の業績見通しを踏まえて、中期経営計画で掲げた目標数値を今後見直す可能性はあるか。

A：中期経営計画で、「ROE 8%を実現する」という目標を掲げています。現状、達成できる、できないを簡単に語る状況にはないと認識しています。しかし、経営者として、実現しなければならない数字だと思っており、これに向けて、取り組みを継続していきます。

Q：リスクバッファ200億円の内訳について教えてほしい。

A：今期の連結営業損益は750億円の赤字見通しとしておりますが、その中には、50億円の構造改革関連費用と200億円リスクバッファが含まれています。これら250億円の特殊要因を除いた実質の連結営業赤字は500億円と算定しておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、この算定値自体が変動するリスクがあります。リスクバッファはそうした業績変動リスクや資産評価損への備えとして予防的に一括で計上したもので、現時点で具体的な中身を定量的にご説明することは困難な状況です。

以 上